全 体 会

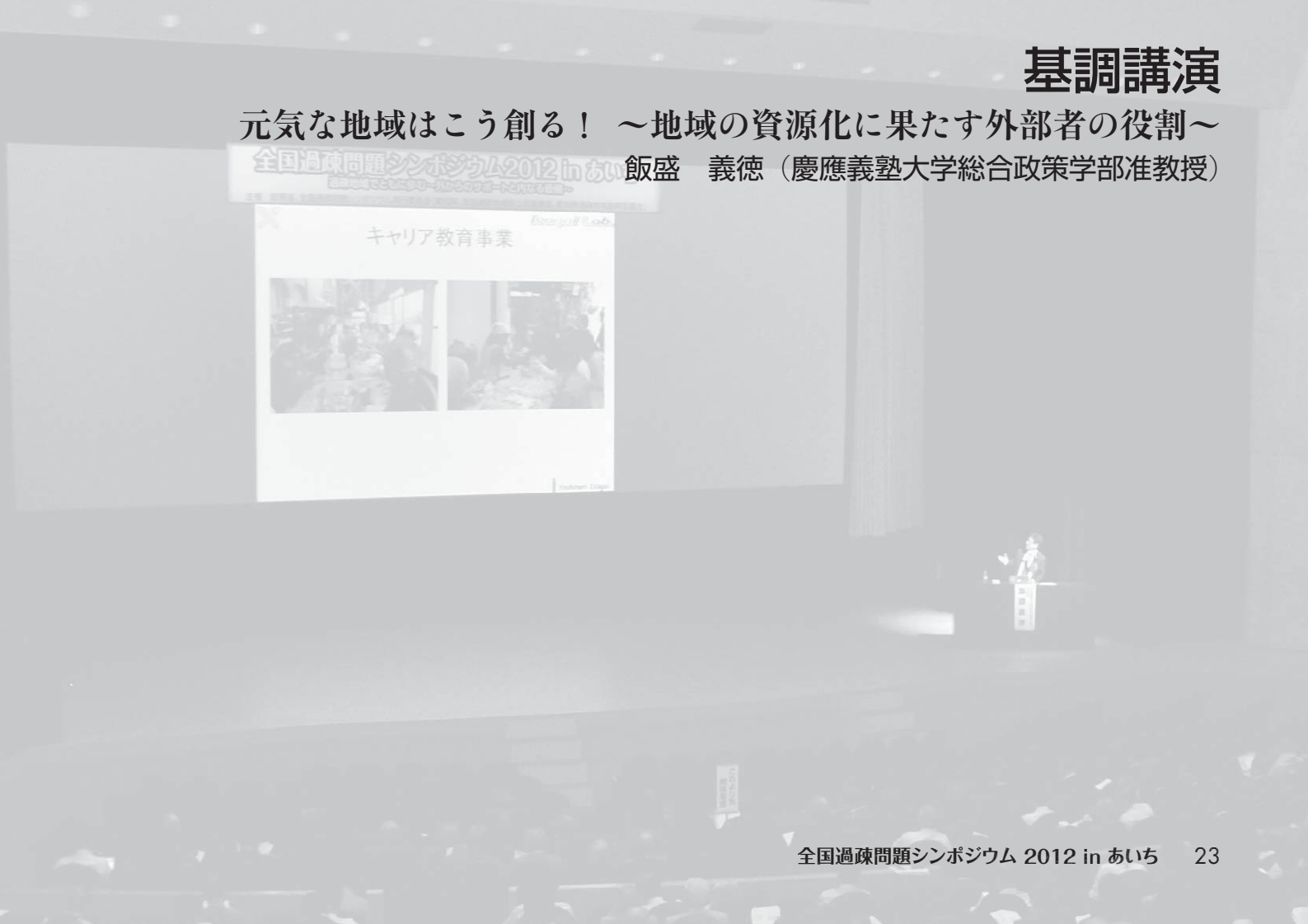
10/11㊍

新城文化会館 大ホール

基調講演

元気な地域はこう創る！ ～地域の資源化に果たす外部者の役割～

飯盛　義徳（慶應義塾大学総合政策学部准教授）



元気な地域はこう創る！ ～地域の資源化に果たす外部者の役割～

慶應義塾大学
総合政策学部准教授
飯盛　義徳
いさがい　よしのり

佐賀県生まれ。慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程修了。博士（経営学）。
1987年、上智大学卒業後、松下電器産業株式会社入社。1992年、慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程入学。1994年、飯盛教材株式会社入社。1999年、NPO法人鳳雛塾設立。2002年、慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程入学。2005年、慶應義塾大学環境情報学部専任講師就任。2008年から現職。
総務省・過疎問題懇談会委員、総務省・地域づくり懇談会委員、総務省・人材力活性化研究会座長、国土交通省・奄美群島振興開発審議会委員などを務める。主著に『「元気村」はこう創る』、『社会イノベータ』など。

皆さんこんにちは。今、ご紹介いただきました慶應義塾大学の飯盛義徳と申します。飯盛山（いいもりやま）の飯盛と書いて「いさがい」と読みます。私の出身地の佐賀市の地名でございます。今日はどうやったら地域を元気にするのか。それを外部者、特に私は大学の教員ですので、大学が関わって地域をどうやって元気にしたらいいのか、ということを皆様に事例を中心にご紹介して、これからの可能性についてお話をさせていただきたいというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

まず最初に、私の自己紹介を簡単にさせていただきます。今、ご紹介がありましたように、慶應義塾大学で教鞭をとっております。専門は経営学ですけれども、大学の授業では、地域づくりとか、地域活性化関係の授業を中心に担当しております。現在、総務省の過疎問題懇談会の委員とか、人材力活性化研究会の座長などを仰せつかっておりまして、また、1999年から佐賀銀行と一緒にNPO鳳雛（ほうすう）塾という人材育成の活動をやらせていただいております。

私は佐賀市で生まれまして、長崎の高校を出まして、その後、大学卒業後、実は５年間、松下電器産業に勤務をいたしまして、その後に大学院に行きました。卒業して、佐賀市で父親が小さい会社を経営しているものですから、そこの新規事業を担うために佐賀に戻りまして、佐賀市で７年間会社の経営をいたしました。その後に、また、大学院博士課程に戻りまして、卒業と同時に慶應義塾大学の教員になっております。ですからずっと研究畑できたわけではなく、NPOを立ち上げたり、大企業にいたり、また地方都市で小さな会社を経営したり、いろいろな経験をしてまいりました。今日は、そういったいろいろな経験をもとに、単なる大学のアカデミックな知識というわけではなくて、いろんな現場を訪問して感じたことなどを含めて、皆様と、色々とお話をさせていただきたいと思っております。

私のゼミ（慶應義塾大学では研究会というふうに呼びますけれど）は、経営学の観点から地方の活性化を考えるという研究会です。実際に、何か地域の中で活動しながら学んでいくというのが特徴でございまして、学生たち中心のプロジェクトチームを立ち上げまして、地域情報化とか伝統産業とか、農林水産業の再生とか、商店街の活性化とか、ファミリービジネスなどに関するプロジェクトチームを立ち上げて、運営をしながら実際学んでいくことをやっております。現在、こういう地域活性化に関することが、ここ近年になく注目をされているのだと思うのですけれども、今、私どもの研究会のメンバーは、昨年度80名おりました。今年度は、70名で活動しております。そのため大学の授業、研究会の授業でも、こういった形で、もはや研究会とは呼べないくらいたくさん学生がおりますけれど、グループワークをするにしても、必ず、最後には自分たちの研究発表をやってもらいます。これも、一人一人研究発表をやってもらうと大変なことになりますから、広い教室を借りまして、そこに一人一人の研究発表の場を設けて、そこを教員が巡回しながら、一人一人コメントをしていくというようなやり方をしております。

私どもの研究会は、夏に必ずどこかの地域にお邪魔をしまして、そこで、地域の問題を発見して、解決して、提言するような地域づくり合宿を、毎年やってきております。今日はその事例を皆様にご紹介しながら、どうやったらそういう大学とうまく連携ができるのか、また、今日は自治体関係者の方が多いと伺っておりますけど、自治体の方々に、どういったことをお願いしたいのか、ということもお伝えしたいと思っております。

私の個人的な研究については、ここにありますように、地域の活性化に関する研究、あとファミリービジネスの研究などをやっております。今まで出版させていただいた本は『「元気村」はこう創る』などです。一番新しいのは分担執筆ですが『創発経営のプラットフォーム』

です。プラットフォームという概念から地域を考えるという内容です。

地域の活性化とファミリービジネスと何の関係があるのだと、お思いの方がいらっしゃるかもしれませんけれど、私にとっては同じようなことだと思っております。元々、専門が経営学でございますし、地域企業のほとんどが、ファミリービジネスと呼ばれる家族で経営されている企業です。また、ファミリービジネスのほとんどが、実は、地域貢献活動をしているのですね。ですから、この二つの研究というのは、地域活性化という観点から見ると、非常に近しい分野だと思っておりまして、今、そのフィールドに密着して、学生と一緒に、実際に現地に行って、社長さんや地域の方々の皆さんのお話をお伺いしながら進めていく、という研究のスタイルをとっております。

今日は、そういう活動の一例を皆様にご紹介します。特に、今年の夏、９月の頭に三重県の尾鷲市（三重県南部）に学生たち40名と訪問をしてまいりました。三重県の皆様、尾鷲市の皆様には大変なご尽力、ご協力をいただきまして、本当に最後は感動的な合宿になったと思っております。その例を中心に皆様にご紹介していきたいと思います。

参考までに、私個人の地域づくりの実践を紹介します。佐賀銀行と一緒に人材育成のためのNPOを立ち上げました。ケースメソッドと呼ばれる特別な教育のやり方をしておりまして、これを1999年から続けてきたところ、県内で、表彰されるような会社がたくさん生まれてきたり、地域活性化を行うNPOがたくさん生まれたり、若い議員さんが誕生したりしました。

また、元々社会人と大学生を中心に勉強会をやっていたのですけれど、小学生からやって欲しいというご要望がありまして、2002年から小学生、今では佐賀市の小学校４校で、子供たちに自分で考えて行動する力、そして、地域を愛する力を育む教育を実践しております。2004年からは、高校生に対してもそのような授業をやっております。あと、2004年から富山、そして、いろんな地域に広がっていっております。これが子供の鳳雛塾、子供の活動の様子の写真ですね、総合学習の時間で、自分で考えさせるような授業をしまして、自分たちで事業計画を作って、佐賀ではどういうものが売れるのか、佐賀ではどういうものが特産品なのか、ということを考えてもらって、それを最終的には商店街の空き店舗で販売をして、ちゃんと決算をして、お金も借りて返す、という一連のビジネス活動を体験してもらっています。最初は１年で終わる可能性もあったのですけれども、子供たちから「こんなに楽しい勉強は初めてだった。」と感想文がたくさん寄せられたり、先生方からは、「地域にとても関心を持つようになった。」とか「行事とか授業に積極的に参加するようになった。」という感想をたくさんいただいて継続することになり、今では４校に増えています。高校でも同じように自分たちで考える力を育むようなケースメソッドを取り入れながら、自分たちで事業計画をつくり、県内の大手企業と一緒に商品開発などをして、それを商店街の空き店舗で販売するというような活動をしております。

わたしたちのミッションは、鳳雛―つまり三国志で有名な鳳雛ですけれども―鳳凰の雛、つまり未来の英雄を育むという意味です。よく、「地域づくりは、人づくり」と言います。まさしくその通りで、地域を担うような人材をまずは育成しましょうということが、私たちNPOのミッションでございまして、それを13年続けてきたわけです。ほかの地域にも広まっていきまして、富山では、「越肥同盟」を締結して、ちゃんと盟約書を作って、関係者一同サインもしまして、連携しております。とにかく、地域から地域を担う人たちを作って、地域から日本を元気にしていこうと。こういうふうなことがこの盟約書に書かれておりまして、これは、今でも私たちの宝物でございます。

今は富山だけでなくて、いろんな地域でやっております。例えば横浜などでも開催しておりまして、横浜の鳳雛塾は、とても活発に活動をいたしております。こういう活動をもとに、大学の私の研究会の活動にも広まっていきました。高校生へのディスカッション式の授業というのは、学生たちが担当してくれています。大学の教員が高校生に話をしようとすると、なかなか距離感がありまして、あまりディスカッションがうまくいかないのですね。それよりも、やはり歳が近い大学生が高校生に語り掛けてくれたほうが、高校生は話しやすい。ですから、学部生たちが中心となって、高校生向けのディスカッション式の地域リーダー育成教材を作ってくれまして、それを元に、高校生がディスカッションするという研究プロジェクトチームを立ち上げてくれました。これは、VITA+（ビータプラス）という研究プロジェクトチームになり、どんどん活動が活発に、大きくなっていまして、高知県や和歌山県、また、最近では、三重県とか島根県などで、こういう活動を活発に展開をいたし

ております。

今、自己紹介をさせていただきましたが、まず、地域づくりということについてお話をさせていただきたいと思います。

地域ってなんだろうと考えると、実に不思議だと思うのですね。今日は、皆様方は自治体の方々が多いですから、皆様にとって「地域」と言ったら、皆様の市町村、もしくは県だと思います。ところが住民からすると、「地域」ってなんですか、と聞いたら、これは実に多種多様なのですね。地域って言葉は、いろんな意味があります。例えば英語にするとよくわかるのですけれども、コミュニティだったり、単なるエリアだったり、リージョンだったり、ローカルだったり、いろんな意味があります。ということは、いろんな認識があるということですし、もう一つは、そこの中に、いろんな考えを持っている人がいる、というのも地域の特徴だと思います。

例えば「観光が活性化すれば、本当に良いよね。」と思っている人がいるかもしれませんし、逆に、「観光が活性化したら、いっぱい人が増えて、騒々しくなって困っちゃう。」と思っている人もいるかもしれません。地域って本当に多様性があって、多義性、いろんな意味がある、という意味ですけど、多義性があるような言葉なのだと思います。そうすると、地域が活性化するために、どういうことをする必要があるか。その時のキーワードは地域資源だと思うのですけれども、この資源となるべき認識も、これまた、多種多様ではないかというふうに私は考えております。

例えば、ご当地の愛知県なんかもそうです。愛知県の資源ってなんですかというと、愛知県まで広くなってしまうとたくさんありすぎて、いろいろ、一言では答えられないかもしれません。例えば、私どもの大学がある藤沢市。皆さん、藤沢市の資源というと、たぶん、江の島の海とか、江の島水族館とか、そういうイメージがあるかもしれませんが、実は藤沢は南北に長くて、北の方では、近郊農業が活発な地なのですね。有名な豚肉などもあります。そうすると、藤沢を活性化して、資源を何にしようか、と思った時に、実は、考え方が多種多様あるということを、まず、認識をしないといけないということが、地域活性化を考えるうえでの大事なポイントの一つだと思っています。

では、地域の資源って何でしょう。私は、人、モノ、金、情報というものがあるのではないかと思います。分かりやすいのはモノですね。自然環境、きれいな海とか山とか、あと、お城の跡とか、農林水産物があります。最近注目されているのは情報と呼ばれている目には見えないものですね。例えば、歴史とか文化とかストーリーです。ここには、例えば、坂本龍馬がこういうことをやった、何かいわれがあるとか。こういうものが、地域の資源として活性化に向けて、何かの動きをするときの大切なキーワードになってくるのではないかというように思うのです。

いろんな地域にお伺いをしますと、「いやぁ、うちには何も…。」とおっしゃることが多い気がします。例えば、私、佐賀出身ですから、佐賀の人はよく言うのですね。「いやぁ、佐賀はなんもなかですから。」と言うのです。だけど、「何も無い」ではなく、地域の活性化を考えるうえでは、資源が無いのではなくって、資源にしていくという姿勢が重要だと思うのです。とにかく、いろんなものがあるわけですから、あるものを生かして資源にしていく、という姿勢が問われるわけであって、これを、私は「資源化プロセス」というふうに呼んでいます。

資源化プロセスというのは、まず、地域にはどんな資源があるのかということを、よくみんなで探して再認識をして、そして、大切なポイントはこの真ん中のところですね。地域の中で、いろんな人たちとのつながりをつくっていって、そして、こういう資源は面白いよねとか、こういうもので行こうよ、という意味づけ。みんなで意識の共有をしていかないといけません。その後に、その資源を、展開をするための戦略を考えて、実行していくというプロセスです。こういうことが、たぶん重要ではないかと感じています。

この赤い文字で書いた「つながり」のところ。実は、ここがよく忘れられがちで、「よし、これで行こう。」となったときに、誰かが思いついて、インターネットのホームページを作成したり、何か発信しようとします。これは悪いことだとは言いません。それがきっかけとなって、こういう繋がりができていくこともありますから。同時並行で進んでいくこともありますが、ただ、ここのフェーズを疎かにすると、盛り上がりに欠けてしまうというところがあります。だから、こういうプロセス、フェーズをずっと繰り返すことによって、創発と書いていますけど、これは予期をしない何か、良いことです。最初はそんなつもりじゃなかったのだけれども、何だかどんどんどんどん大きくなって、こんなになったよ、ということです。けっこう皆さん、地域づくりの活動などで聞いたことありませんか。

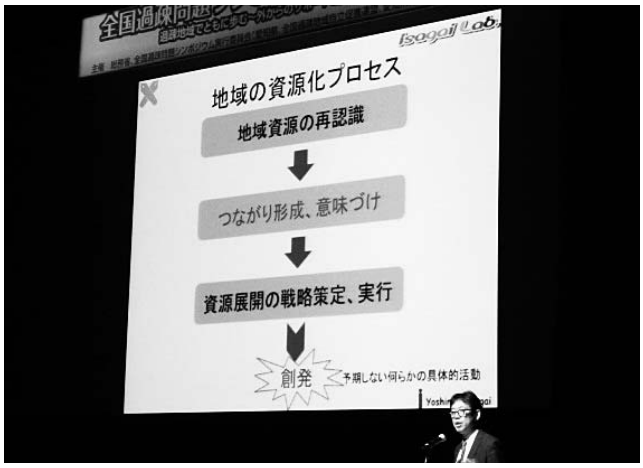
実はさっき私が紹介したNPO鳳雛塾。これは最初にやったときは、私が県政への論文コンテストで、地域を活性化するためには人材育成が絶対必要だということや、こういう活動を行う必要がある、ということを書いて、それが採用されたところから始まりました。いろいろやろうと思ったのですけれども、お金もなければ、私は佐賀を離れてずっと長崎、東京にいましたので、佐賀にはそんなに友達もいないので、どうしようか、と考えあぐねていたのですけれども、たまたま、その書いた県政論文コンテストの論文が、全文、佐賀新聞に掲載されました。それが今、事務局長を10年以上やってくれている佐賀銀行の横尾の目にふれて、横尾が銀行に提言してくれたのですね。それで出会って、始まったのですけれども、最初に始まったときは、ディスカッション式の授業をやろうとしていました。そうすると、一人だけだと、講師と受講生一人ではディスカッションできませんから、二人か三人くればやろうよという話をしていました。で、蓋をあけてみたら40人来ました。小さい佐賀市で驚きました。当初は一期でやめるつもりでした。ところが、「もっと続けてほしい。」という声が殺到しまして、二期やった。二期目も、二期が終わって、大変だったからやめようかと思っていたけれども、また、続けてほしいということで、ずっとそういう声が到着しているうちに、もう13年継続しています。しかも、小学生まで広がって、いろんな地域まで広がって、高校生まで広がって、というふうに、こっちはまったく予期もしていませんでした。そんなところまで広げようとも思ってもいなかったのですけれど、そうなってきました。ですから、やはり地域づくりというのは、予期もしない、良いことが次々と生まれるまで、どんどん発展していかなければならない。そのためには、地域のいろんな人とのつながりを作っていくことが必要ではないかというふうに思っております。

そのためにとても重要な役割を果たすのが、私は、外部者だと思います。外部者の好例として、地域おこし協力隊の方がいらっしゃいます。地域おこし協力隊の方々は完全に外部者ですね。よそ者と呼ばれているように期待が非常に大きいわけです。いろんな地域のつながりをつくることができます。実は、大学も同じだと私は思っています。大学も今まで地域の中で繋がっていなかったような方々をつなげる役割を持つということが、最近わかりました。それを実例をもとに皆様にご紹介したいと思います。

大学は地域と連携してなかったのかと言われたら、実は、昔からいろんな連携をしていました。よくいわれる産官学連携などはそうです。そこから技術を生み出すこともやっていましたし、例えば、大学の教員が、地域の中で何かお話をさせていただくことなどもまた、地域と大学の連携の一つでしょう。あとフィールドワーク研究をするために地域の中に入るということも、これも連携の一つかもしれません。さらに、大学祭の中で、地域の物産を販売するなんていうこともありますよね。これも地域大学連携だと思いますが、私が、今日、申し述べたいのは、大学の外で、そして、何らかの地域づくり活動の実践を行う、ここの部分をご紹介したいと思います。

これを総務省では、「域学連携」と呼んでいらっしゃいます。地域の「域」と大学の「学」で、域学連携。これが、いろんな可能性を持っているのではないかと、最近思っております。この言葉が生まれたのは最近なのですが、これからますます期待ができるのではないかと思っております。総務省の定義では、「域学連携とは大学生と大学教員が」と書いてありますが、私は、個人的に大学生の役割が非常に大きいと思います。「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPOなどとともに、地域の課題解決、または、地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動」と書いてあります。それで、一つ一つ活動事例について、観光活性化とか、農業の活性化とか、地域の問題解決とか、こういう、いろんな事例が紹介されています。

地域においてのメリットは、大学の技術や知識がいかされるとか、若い人の力を活用することができるとか、地域自体が元気になるなどがあります。大学にとっては、まさに生きた学びの場ですよね。実践の場が得られると



か、研究や教育にフィードバックできる。こういうお互いにとってWin－Winの関係があるのではないかということをおっしゃっていまして、これはまさしく、そのとおりだと思います。そして、これからますます重要になってきて、注目されていくのではないか、と私は個人的に思っております。

私たちは、域学連携という言葉が、まだなかった2005年から、こうやって地域の皆様と一緒に、学生たちと一緒にわいわい交わってワークショップなどをしながら、地域の活性化をどうすればよいかということを、みんなで議論し、学び合うような活動を続けてまいりました。今もずっと変わりません。どういうやり方をしたかというと、ひとつはまず、基本的には研究会のメンバー全員で、といっても私たちは70名の大所帯ですから、日程が合わなかったりして実際は40名くらいになりますが、毎年、地域の皆様にご理解をいただいて夏合宿にうかがいます。だいたい二泊三日で、地域の問題発見解決のための合宿です。学生たちは、事前学習をしっかりと行い、地域に赴いてフィールドワークをしたあとに、完全に徹夜して問題解決の提言を作成します。その後、研究会の中で興味のあるメンバーを公募します。その学生たちが、今度は継続して研究プロジェクトを立ち上げて、「○○元気プロジェクト」という名前で運営するようになります。体制は、総責任者は私、教員の私と、総括リーダー（プロジェクトの企画をしたり、その全体の取りまとめ、調整をしたり、学生たちの面倒を見たりなど）を私の研究会の一期生で、明日も分科会で講演をさせていただく、慶應義塾大学大学院の博士課程を終え、今、非常勤講師、特任助教の西田みづ恵が担当しております。あと、学生リーダーはその地域ごとに違いますし、また、メンバーは当たり前ですけど卒業していきますので、年々変わっていくような体制になっております。

一つご紹介したいのは、2009年から推進している長崎県との連携です。これは、2009年に、長崎県の金子知事（当時）と私どもが研究教育包括協定を結びまして、長崎県のいろんな市町の課題を県の方で取りまとめていただいて、それを大学の方にいただき、大学では興味のある学生を公募しています。申請書を教員で審査をして、メンバーを選考して、教員の引率のもとに、地域の問題発見解決をするという活動を2009年からやっておりました。この取組自体は、実は昨年度でいったん終わったのですけれども、学生たちは、継続していろんな活動に勤しんでおります。

私が担当したのは長崎県の新上五島町というところで、学生たちは情報発信ワークショップを主として推進しました。大変すばらしい宝があるのにあまり情報発信がなされていないので、その情報発信をどうするかということを、学生たちが主体となって、地域の人たちと一緒になって、情報発信をやっております。やっぱり学生たちが頑張ると、地元の方々も本当に応援してくださって、また、地元の新聞社もこのように取り上げてくださいまして、地域の方々には感謝をしている次第です。

もう一つご紹介したいのは、福岡県八女市。これは、2010年から活動を継続しています。今年度、2012年度が最終年度の活動になります。八女市は、市町村合併をしまして、広域になりました。そこで、防災システムの整備のためにコミュニティFMを立ち上げたのですが、普段からラジオを聞かないとコミュニティFMが発揮をする真価も半減してしまいますから、普段からラジオに親しんでもらうための施策を、学生たちと一緒に検討、推進させてせていただいています。特に、市民の方々がラジオに関心を持っていただいて、「ラジオを活用したまちづくり」というものができるかどうかということを、ずっと実践をやらせていただいております。これも、最初は研究会の学生大勢で合宿をしまして、問題発見解決の提言を市長さん達にしました。その後、希望者を募って、10名くらいの学生たちが八女市に入りまして、活動を継続しております。これも地元のマスコミの方々などに大変ご理解をいただきまして、いろんなワークショップを行ったり、住民の方々の活動があれば、このようにご紹介をいただいております。

昨年度は、山形県の鶴岡市にまいりまして、地元の農産物の資源をいかして、これを地域づくりにつなげる活動を行いました。農産物をスイーツに加工したいと

いうことでしたけれど、私たちは、スイーツに加工する技術、ノウハウがございませんので、地元の調理科をお持ちの高校さんと連携をさせていただきまして、作るのは高校生、そして、それを販売したり、地域活性化につなげていく方策を考えるのは、大学生と高校生が一緒になって取り組むことといたしました。具体的には、ワークショップをやって、社会人の人たちや行政の人たちに食べて評価してもらう、という合宿をやりました。これがその時の大学生と高校生が一緒になって活動した様子で、このように大きく紹介をしていただきました。

そして、今回中心的にご紹介したいのが、つい最近まで行っておりました三重県尾鷲市での活動です。尾鷲市は人口２万２千人くらいの三重県の南部、和歌山県の県境に近いところで、日本有数の雨の多い地域で有名ですね。今回は、尾鷲市全体の活性化というよりも、まず今年は初年度ということで、尾鷲市にあるこの赤い丸の地域、海岸沿いの港のある、三木里地区と三木浦地区と早田地区と九鬼地区、この４地域に分かれて、この４地域の活性化を大学生と住民の方々と一緒になって考える二泊三日の合宿を行ってきました。この合宿には、地元の三重大学さんにも多大なる協力をいただき、一緒に実施しました。住民の方々と一緒になって、地域の活性化をどうするか、ということを９月５日から７日まで議論しました。先程申し上げたように４地域、三木浦、三木里、九鬼、早田の資源の発掘をしたり、問題発見解決をしたり、またフィールドワークをしたりとかいういろんな活動は、すべてフェイスブックに写真、記事をアップしていきました。そして、最終日には、市長さんや住民の方々皆様の前で、どのような活動をすれば良いのかという、住民の方々と議論して、合意をした内容の活性化の提言策を、地区ごとに発表しあうということを実施しました。

そして今週、この三重県尾鷲市元気プロジェクトチームが公募で決まりまして、リーダーが決まったばかりです。これから本格活動をするという状況でございます。これがその４チームのフィールドワークの様子で、たくさんの住民の方々に案内をしてもらって、ここがうちの良いところだよ、というところを、船に乗せてもらったり、山を登ったり、いろんな地域、地域に分かれて、このような活動をしてきました。そして、地域ごとに、このように住民の方々と膝をつきあわせて、「課題が、今どこにあるのか。」、また「どうやったら解決できるのか。」、一方、学生たちは、「どう見たのか。それは、本当に地域の方々が思ってらっしゃる課題かどうか。」そういうことも含めて、忌憚のない意見交換を行いました。もちろん地域の方のほうが、地域のことをよくご存知のことは当たり前です。しかし学生たちは、感じたことを素直にお伝えする、ということを心がけました。これが三木浦の様子で、これが三木里の様子です。これが早田の様子で、これが九鬼の様子です。それぞれの地区で、学生たちが４地区に分かれて活動しました。今回は40人という団体で入りましたので、４チームに分かれてできた話ですけれども、このような活動を通して最終発表会につなげました。

それぞれのチームが最終発表会をしてとても面白かったことがあります。二日間、地域の方々と密着して、ずっと一緒に活動していたわけですね。議論をずっとしていたわけです。そうすると本当に信頼感が芽生えて、この最終発表会の時に、このように人がたくさんいるのは、これ各地区の応援団の人たちなのです。一緒に学生たちと議論してくださった方々です。そうすると、声がかかるわけですね。「よっ、がんばれ。」とか「三木里、がんばれ。」とかいう声がかかって、本当に感動的な最終発表会になりました。発表会では、いろんなポイントから順位をつけまして、市長さんから表彰してもらうことにしました。優秀地域は市長賞をいただくようにしたのです。フィールドワークやワークショップの様子はずっと、一つ一つ、このようにフェイスブックにアップをしまして、みんなで情報共有しながら、ここの地域がこんな良いことをやっているぞということで競争意識も持てる、つまり４地区で競争しながら協調するように進めていったということです。これが、みんなで撮った最終報告会での集合写真です。今回も、いろんな新聞やテレビでご紹介いただきました。こうやって紹介いただくとまた、学生たちもやる気がでますし、地域の方にも元気が出ることになるのではないかというふうに、私は思っております。

私は、外部者（特に大学）の連携のポイントには三つあると思っています。一つは、地域の資源化プロセスです。実は、大学、よそ者が関わることによって、資源化プロセスが非常に効果的に回り出す、と思っています。もう一つは、これだけのたくさんの学生たちが行きますから、地域内外のファンが増えます。今まで、尾鷲市というところを知らなかった学生がほとんどです。三重県に入ったことがない、という学生がほとんどでした。けれども今回行って、尾鷲市のファンになっている

のですね。こういう効果がある。そして地元の方々にとっては、何か学生たちの元気に触発されて、何かの行動を起こそうという人たちが現れてきます。これは、どの地域に行ってもこういう現象がみられます。

さっき申し上げた資源化プロセスは、実はすべてのフェーズで、大学などとの外部者と連携すると、うまく回り出します。例えば､地域の資源です。地域の方々は、いかに素晴らしい風景があっても見慣れています。「きれいな海」と言っても、毎日見ているとあまり何も感じないかもしれませんが、学生たちから見ると、「こんなきれいな海はじめて見た。」というようなことになります。実際、地域の方々も、「学生たちの外部の意見がものすごく参考になった、新鮮になった。」とか、「何かを始める気になった。」とか、「実際始めました。」という言葉を、インタビューとかアンケートでいただきます。

そのためには、どうしたらいいのか。大学が、簡単に地域に入っていけるか、というと、そうではありません。大事なのは、大学と地域が、上手に連携することですね。大学が、急に地域に入りますから、そう簡単にはうまくいくわけがありません。きちんと両者で調整しないといけません。そういう場づくりをしないといけなくて、ポイントはやはり、信頼をどう形成するか、とか、インセンティブ（誘因）をどうするかです。お互い、どういうメリットがあるかを明示しなければなりません。あと役割をどうするかも大切です。こういうことを、きちっと規定していかないといけないですし、やはり、たくさん大学生が入るとなると、それだけ受け入れてくださる地域の方のご負担は、当然増えます。しかし、その調整をしてくださっている間に、地域間のいろんなつながりがうまれてきたり、協力がうまれてくるのも事実です。私はこういう場づくりをすることを、「プラットフォームを設計する」という言い方をしています。そして、このプラットフォームをつくる人のことを「プラットフォームアーキテクト」と呼んでいます。2005年から域学連携をやってきて振り返ってみますと、できれば複数、多くの学生、もしくは地域の方々が、一緒になって何か活動をするようなプラットフォームを設計することが大事ではないかと思います。おそらく、一人、二人だとインパクトがないような気がしております。

もう一つは、お互いの意見、考えを否定しないで、尊重しあって、忌憚のない意見交換をする、ということが大事だと思っています。当然、議論するときには、失礼があってはいけないことは学生たちに十分に指摘しています。しかし、感じたことは素直に言わないと地域の方々のためになりません。そこは、礼儀作法をきちっとおさえながら、地域の方々には感じたことをお伝えする、もちろん、地域の方々も、学生たちに対して、忌憚のない意見を言っていただくということが大事だと思っています。地域と大学では、全然違う考え、全然違う行動様式です。それが急に一緒になって、うまくかみ合うことはそう簡単ではないかもしれません。

そのためには、大学でもなく地域でもなく、という意味で､キーワードは「縁（えん･ふち）」だと思っています。面白いことに、「縁（えん）」は、つながりを意味します。けれども､「ふち」という意味もあります。ですから、できるかぎり区別をしなくて、オープンで、大学でもあり、地域でもあり、大学でもなく、地域でもなく、みんなが学び合う、みんなが教え合って、学び合うようなプラットフォームをつくる、ということが一番重要だと思っています。特に重要なのはそこで､信頼が醸成されて、先程申し上げた創発、いろんなことが生まれていくベースになると思うのですが､特に重要なのが、ここの部分。知識や資源を共有する、お互い持っている知識や資源をすべて共有しあって、出し合って、学び合って、教え合って、この姿勢をすることによって、それぞれ行動様式とか考え方、地域も違えば世代も違う人たちが融合する第一歩になると思っています。簡単ではありません。コーディネーションが必要です。そのコーディネーションの在り方などを我々大学は今、一生懸命研究をし、勉強しておりますので、ぜひ、そういう成果は、皆様に追々ご紹介したいと思っておりますし、ここの部分は、今月発売される『月刊ガバナンス』に少し記事で書かせていただいておりますので、ご興味があればそちらをご覧いただきたいと思っています。

私が、個人的に注目しているのが岩見沢駅という北海道の駅です。ここは駅ですが、結婚式が行われたり、子供のプラレール大会が行われたり、絵画大会が行われたりという、市民主導のいろんな活動が起こって、コミュニティーセンターのような様相です。ここが今、どういう境界設計をして、市民と市民が学び合ったり、交流をしあって､新しいことが起こるようになったのか、というメカニズムを、今研究しているところです。そのためには、やはり、そういうプラットフォームを設計できる人材（プラットフォームアーキテクト）を育成しないといけません。この人材を育成するということは、大学のすごく重要な役割ですし、こういう若い人がたくさ

んいる拠点というのは、大学しかございません。ですから、私は、大学と上手に地域が連携をする、人材育成をしながら連携をすることによって、地域は変わっていくのではないかと思っています。これからやるべきことは、そういうことがうまくいくような研究や教育の方法を確立したりとか、またその情報を共有する方法を確立したりとか、そして、何よりも大事なのは、行政の方々のご理解、ご支援です。たくさんの学生、例えば、40人もみなさんの地域に入ると考えてください。一気にです。大変なことになると思います。宿泊所をどうするか、移動をどうするか、それを一緒になって考えてやっていくうちに、地域と大学が一緒になって、地域の方々の中でも、何か一緒になって新しいことが起こっていく。こういう姿を、これから日本が元気になるために目指していきたい、というふうに思っておりますので、どうか皆様との今後の交流、情報交換、そして、何らかのご理解、ご支援を賜りたいと思います。

これで、私のお話は終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。